

入学前の学習習慣や志望度と入学後の成績推移について

天野 哲彦, 樽松 理樹 (岩手県立大学)

主体性、意欲、興味・関心などは、入学後の学修の伸びのためには重要な要因だが、それらを個別に取り出して測定することは困難である。また、それらは大学入学までの学びと連続して育成すべきであり、入学後に速成することは容易ではない。ゆえに、高大連携活動によって、生徒、学生を育てることが大切であり、入学者選抜はその通過点として、生徒、学生を育てるという目的で設計される必要がある。本稿はその前提として、大学入学後の成績が、高校生の学習習慣や入学時の意識とどのような関係があるのかを、入学時アンケートと GPA をもとに考察する。考察の結果、大学入学時まで主体的学習姿勢と適度な自学習習慣を身につけた学生の成績推移がよく、大学名よりも学部・学科の専門性、自分の興味関心との一致度が入学後の成績に強く影響することが推定された。

キーワード：興味関心、学習習慣、専門性、成績、入学時調査

1 はじめに

入学者選抜においては、入学試験時点での教科学力のみではなく、勉学における自律的姿勢・態度や向学心などを潜在的能力として考慮したいという考えが一般的であろう。また、入学後の「伸び」は、基礎学力や才能の他に、学習習慣や志望する学問領域への関心・意欲、入学した大学・学部・学科への「適合感」なども関連していると考えられる。

この点については、高校時代までに習得された姿勢・態度は、大学、社会人を通じて維持、影響することが示されている(溝上 他, 2018, 2022)。

本稿では、大学入学時点での学生の意識や学習経験と大学 4 年間の成績推移との関係を考察することで、選抜制度の改善と高大連携・接続活動へのヒントを得たいと考えている。

本稿で活用するデータは、以下のとおりである。

- (1) 2020 年 4 月入学 2023 年 3 月卒業の本学四年制学部学生の GPA
- (2) 同じく 2020 年 4 月入学 2023 年 3 月卒業の本学四年制学部学生の入学時アンケート(入学直後、授業開始前に実施)

(1)は 2020 年度の本学四年制学部(看護, 社会福祉, ソフトウェア情報, 総合政策)入学者全 463 名(編入学を除く)から、退学・留年・休学者などを除き、いわゆるストレートで卒業した 404 名を対象としている。このストレートで卒業した学生の数を入学者数で割った数をストレート卒業率(GSR)とし、以下の各表で項目毎に示している。なお、表中の「計 GSR」とは入学者全体の GSR($404/463=0.87$)である。

なお、退学、留年、休学などの背景には、成績不振

の他に上位校への編入学、留学、経済事情、病気・怪我など様々な原因が考えられるが、それを知ることは困難であることから、本稿では退学・留年・休学者を分析の対象から外すこととした。

(2)は入学直後に実施した GPS-Academic(株式会社ベネッセ iキャリアが作成)に含まれるアンケートの一部を利用している。なお、前述の入学者全員 463 名がこのアンケートに回答している。

(2)のアンケート項目の中から、「学習習慣」に関する質問項目として「読書習慣」「自習時間」「主体的学習姿勢」の 3 つを取り上げる。また「志望度」に関する質問項目として「大学志望度」「学部・学科志望度」の 2 つを取り上げる。「一致度」に関する質問項目としては「入学してよかったか」と「学部・学科と興味関心の一致」を取り上げる。

2 大学入学時の学習習慣

2.1 読書習慣

質問「あなたは普段、どの程度本(マンガや雑誌を除く)を読んでいますか。あてはまるものを選んでください」について、表 2.1, 図 2.1 に示す結果が得られている。表 2.1 は、各選択肢の回答者数と回答者グループの GSR を、図 2.1 は各選択肢の回答者のその時点までの GPA の平均値、例えば 2 年前期であれば 1 年前・後期と 2 年前期の全履修科目の GPA の平均値を示している。以後同様である。

表 2.1 読書習慣

回答		人数	GSR
1	月に 4 冊以上	33	0.85
2	月に 2～3 冊くらい	84	0.86
3	月に 1 冊くらい	157	0.89
4	ほとんど読まない	130	0.87
計		404	0.87

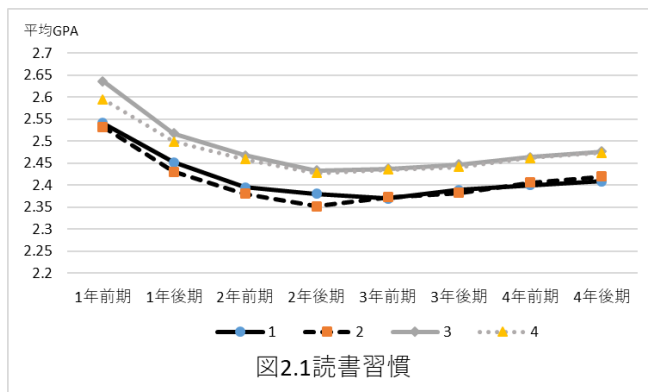


図2.1 読書習慣

GSR, GPA とともに差は小さい。ただし、入学時に読書時間が少ない学生の方が大学 4 年間、一貫して少し成績がよい傾向がある。このことから一般的な読書と大学での学びとの間に関連がないことや、自由な読書時間と勉強時間とがトレードオフ関係になっていることを想像できる。

しかし、大学入学時に限らず、高校 1, 2 年次あるいは小中学生のときの読書習慣と大学入学後の成績推移の関係は異なる傾向を示すことも考えられる。また、文章を読むのに、紙媒体ではなく電子媒体を利用する若者が増えていることも考えられる。

2.2 自習時間

質問「高校 3 年次を平均すると、あなたは週あたりどのくらい自習をしていましたか（塾や予備校の授業時間を除く）。あてはまるものを選んでください」について、表 2.2、図 2.2 に示す結果が得られている。

表 2.2 自習時間

回答		人数	GSR
1	10 時間以上	109	0.92
2	7～10 時間未満	51	0.94
3	5～7 時間未満	58	0.91
4	4～5 時間未満	63	0.86
5	3～4 時間未満	50	0.89
6	2～3 時間未満	43	0.78
7	1～2 時間未満	20	0.83
8	1 時間未満	8	0.53
9	自習はしていない	2	0.33
計		404	0.87

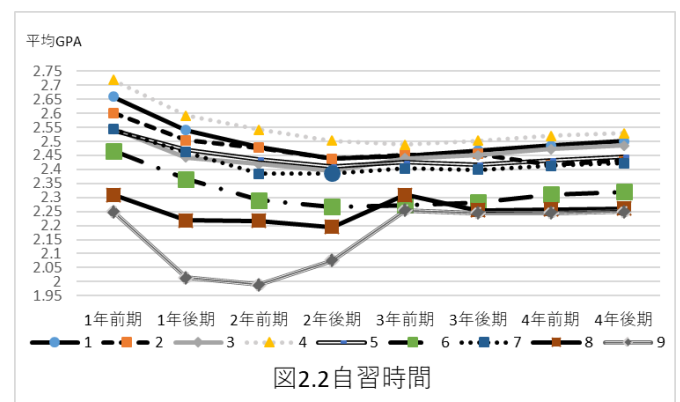


図2.2 自習時間

自習時間が極端に少なかった学生（「8. 1 時間未満」「9. 自習はしていない」）は 1, 2 年次で成績が低いが、3 年次から回復している。しかし、それらの学生はそれぞれ 8 名、2 名と数が少ないので、これを一般的な傾向とは言いがたい。

また、入学時に「8. 1 時間未満」や「9. 自習はしていない」と答えたグループは GSR が低く、退学、留年、休学者が多い。

「1. 10 時間以上」から「5. 3～4 時間未満」の間は、自習時間が長かったほど GPA と GSR が高いとはいえず、明確な差は見られない。予備校での勉強や高校での補習の影響も加わっているはずであり、自習時間が長いことが必ずしも勉強時間が長いことを意味しないことも関係していると考えられる。

しかし、週に数時間以上の自習習慣を身につけていることが、退学、留年、休学などを避け、入学後の成績にプラスに働いていることは確かである。

2.3 主体的学習姿勢

質問「あなたの高校時代の学習への取り組みについて、次の各項目にあてはまるものを選んでください。

1. よくした
2. 時々した
3. ほとんどしなかった
4. まったくしなかった

- (1) 必要な予習や復習はしたうえで授業に臨む
- (2) 授業中、グループワークやディスカッションに積極的に参加する
- (3) 板書や投影資料以外でも大事なことはノートにとる
- (4) 授業の内容でわからないことは教員に質問や相談に行く
- (5) 授業と関わりのないことでも、興味を持ったことについて自主的に学習する

について、表 2.3.1、図 2.3.1 に示す結果が得られている。

回答者は(1)から(5)についてそれぞれに 1 から 4 までの数字を返すが、ここでは「主体的学習姿勢」としてまとめて評価するために、項目(1)から(5)に返された数値の平均を四捨五入して整数値として利用することとした。

また、上記の質問方法では、4 から 1 へと数値が小さい方が主体的学習姿勢を身につけていることになるため、誤解を招かないように逆転項目処理して、「1. まったくしなかった」「2.ほとんどしなかった」「3. 時々した」「4.よくした」とした。

平均回答得点が 3 とカテゴライズされたグループと 4 にカテゴライズされたグループで学生全体の 89%を占めており、全体としてみると主体的学習習慣をある程度身につけている新入生が多いことが分かる。

表 2.3.1 主体的学習姿勢

回答	人数	GSR
1 まったくしなかった	3	0.75
2 ほとんどしなかった	43	0.86
3 時々した	278	0.87
4 よくした	80	0.92
計	404	0.87

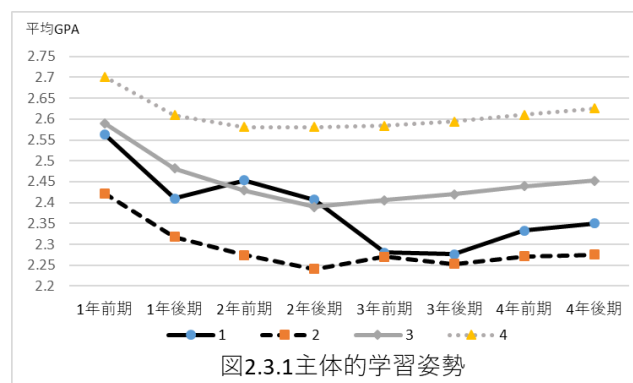


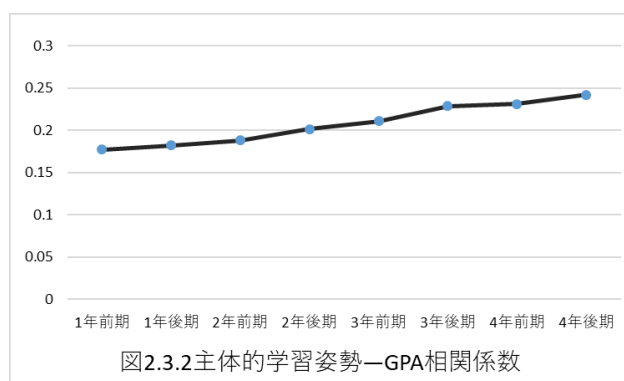
図 2.3.1 をみると、主体的学習姿勢を高校時代に身につけた学生が入学から卒業まで一貫して成績が高いことがわかる。このことはベネッセ教育総合研究所での研究結果で、高校時代に主体的学習姿勢を身につけていた大学生の学習時間が長い、とされているのと同傾向の結果である（木村，2019）。

グループ 1 の成績上下動が大きいのが、これは 3 名と人数が少ないことから来ていると思われる。なお、グループ 1 は GSR が 0.75 であり、退学、留年、休学などの比率が極端に高いわけではないが、この点についても、人数が少ないので一般化できない。

主体的学習姿勢の得点（整数値化していない）と大学 4 年間の GPA との相関係数の推移を表 2.3.2、図 2.3.2 に示す。高校 3 年までに身についた主体的学習姿勢は学年が上がるにつれて成績に対してより大きな影響を及ぼす傾向があることがわかる。このことは、（溝上 他，2018，2022）と同様の傾向を示している。

表 2.3.2 主体的学習姿勢—GPA 相関係数

1 年前期	1 年後期	2 年前期	2 年後期
0.177	0.182	0.188	0.201
3 年前期	3 年後期	4 年後期	4 年後期
0.211	0.229	0.231	0.242



3 志望度

3.1 大学志望度

質問「あなたが通う大学はどの程度の志望順位でしたか。あてはまるものを選んでください」について、表 3.1, 図 3.1 に示す。

表 3.1 大学志望度

	回答	人数	GSR
1	第一志望だった	242	0.90
2	第二志望だった	104	0.85
3	第三志望以下だった	58	0.84
計		404	0.87

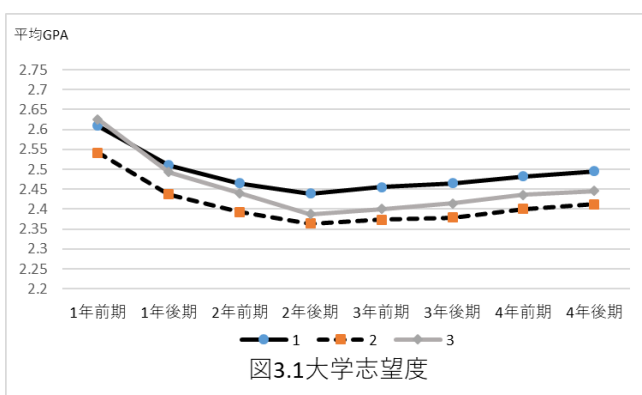


図3.1 大学志望度

第一志望の学生の成績が高い傾向があるが、差はそれほど大きくはない。また、GSRにも大きな差はない。これは意外な結果とも思えるが、少なくとも本学の場合は、大学名よりも学部・学科の専門性や立地などによって選ばれていることが示唆されている。つまり、もともと大学名へのこだわりが小さい傾向の学生が集まっている可能性がある。このことは、後述の「3.2 学部・学科志望度」で「2.第二志望だった」「3.第三志望以下だった」が少ないことが傍証している。

また、一般選抜前期日程の受験生の場合、共通テストの自己採点結果によって出願校を決定するというのが現実なので、アンケートで第一志望と答えた中に、もともとの第一志望ではない者もいるはずである。このことが、大学志望度による差を見えにくくしている可能性もある。

3.2 学部・学科志望度

質問「あなたが所属する学部・学科（学びたい学問分野）は、あなたが通う大学の中でどの程度の志望順位でしたか。あてはまるものを選んでください」につ

いて、表 3.2, 図 3.2 に示す結果が得られている。

表 3.2 学部・学科志望度

	回答	人数	GSR
1	第一志望だった	382	0.88
2	第二志望だった	18	0.82
3	第三志望以下だった	4	0.8
計		404	0.87

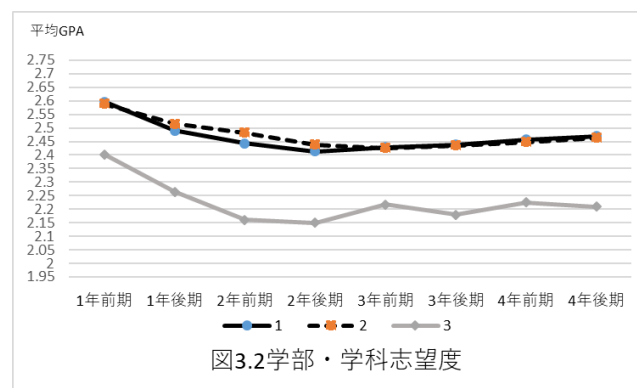


図3.2 学部・学科志望度

学部・学科志望度が第3志望だった学生は大きく成績が低く、大学志望度とは異なる結果となっている。ただし、今回の調査で第3志望者は4名しかいないので、確定的な傾向を読み取ることは危険である。

なお、第二志望と第三志望以下の学生が少数であることは、前の「3.1 大学志望度」で述べた、本学は学部・学科の専門性によって選ばれているという推測を裏付けてもいる。本学の場合、学部・学科によって試験科目が大きく異なることもこの傾向を強めていると思われる。

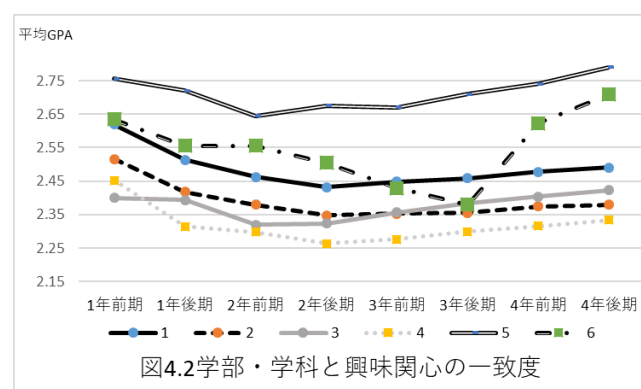
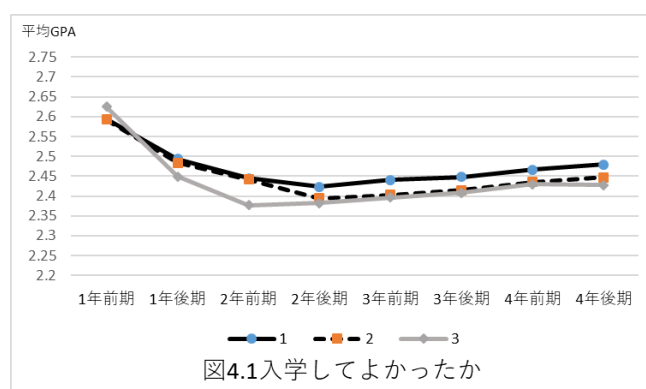
4 一致度

4.1 入学してよかったか

質問「あなたは、あなたが通う大学に入学してよかったと思いますか。あなたの気持ちにあてはまるものを選んでください」について、表 4.1, 図 4.1 に示す結果が得られている。

表 4.1 入学してよかったか

	回答	人数	GSR
1	とてもそう思う	255	0.88
2	どちらかといえばそう思う	140	0.87
3	あまりそう思わない	9	0.75
4	まったくそう思わない	0	
計		404	0.87



GPA の推移について、明確な傾向は見られない。ほとんどの学生が入学してよかったと思っていることがその原因と予想される。学部・学科の専門性や大学の地域特性からほぼ志望通りに入学を果たした学生によって構成されているというのが本学の特性である。

なお、3 と答えた学生の GSR は 0.75 なので、極端に低いわけではない。入学時点では入学をあまりよいこととは思わなくても、大学生活に適合して卒業を果たしている学生が多数派であることがわかる。

4.2 学部・学科と興味関心の一致

質問「あなたが現在所属する学部・学科・コース等の学問分野と、あなたの興味関心とは一致していますか。あてはまるものを選んでください

1. 一致している
2. 一致していないが、興味関心に近い分野
3. 興味関心とは異なる分野
4. まだ自分の興味関心がわからない
5. 所属する学部・学科の学問内容がよくわからない
6. その他」

について、表 4.2、図 4.2 に示す結果が得られている。

表 4.2 学部・学科と興味関心の一致

	回答	人数	GSR
1	一致している	315	0.90
2	一致していないが、興味関心に近い分野	63	0.85
3	興味関心とは異なる分野	3	1.00
4	まだ自分の興味関心がわからない	19	0.66
5	所属する学部・学科の学問内容がよくわからない	2	1.00
6	その他	2	1.00
	計	404	0.87

3, 5, 6 は人数が少ないことから、1, 2, 4 に注目すると、学部・学科と興味関心が一致しているほど、一貫して成績がよいことがわかる。

「3. 1 大学志望度」「3. 2 学部・学科志望度」の考察結果と合わせて考えると、少なくとも本学に関しては、大学よりも学部・学科の専門性によって入学を決めており、それが自分の興味関心と一致していると学力を伸ばすことができているといえる。

どの大学かよりも、学問研究の専門性を選んで入学した学生の方が成績がよいという結果は、早稲田大学生を対象にした研究でも得られている（遠藤・山田、2023）。

一方、3, 5, 6 は「一致度」という点ではマイナス傾向を持つグループだが、退学、留年、休学などせずに成績もよい。しかし、人数が少ないので一定の傾向を見いだすことはできない。

5 終わりに

入学時アンケートと GPA をデータとすることで、入学時の学生の考え、姿勢・態度などと在学 4 年間の成績との関係を考察した。結果、高校教育を通じた主体的学習姿勢と、高校 3 年次に適度な自習習慣を身につけた学生の成績推移がよいことがわかった。

入学する大学・学部・学科については、大学名よりも学部・学科の専門性、さらに自分の興味関心との関係が成績に強く影響することが推定された。

以上の結果から、高校までの教育で生徒の主体性を育てることの重要性がわかる。高大が連携して高校生の知的興味を高めるとともに、何に興味があるのか、どのような学びに向いているのか、生徒が自己発見できるよう促す必要がある。入学者選抜も高校生の多様な知的興味を引き出し、育てるものへとさらに発展する必要がある。

高校 3 年次の読書習慣と大学での学習成果との関

連は重要なテーマと思われるので、どのような内容の本を何の媒体を使ってどの程度読んだか今後精査する必要がある。

また、入学前教育について、基礎学力の維持・向上のみではなく、学部・学科での学びへ興味や関心を高めるような、高大接続を意識した指導方法を取る必要がある。同様に、入学後の基盤教育、教養教育においても、専門教育への興味関心を高め、また積極的な学習姿勢を獲得できるようにカリキュラムや授業形態を工夫すべきともいえる。この点に関し、大学進学後とくに初年次教育でのカリキュラムや授業形態と成績推移との関係については今後の研究課題としたい。

この研究では、大学生の成績を GPA のみで測らざるを得なかった限界がある。専門科目の成績に絞った分析をすれば「志望度」や「一致度」で若干異なった結果が得られると予想される。

また、今回は 2020 年 4 月入学生全員を一括したが、学部・学科、入試区分、出身地などに分けて分析すると、異なる特徴が検出される可能性がある。さらに、次年度以降も合わせることでデータを増やし、より信頼性の高い分析が可能となる。これらが今後の課題である。

参考文献

溝上慎一（責任編集）京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾（編）（2018）『高大接続の本質―「学校と社会をつなぐ調査」から見えてきた課題―』学事出版。

溝上慎一・学校法人河合塾（編集）（2022）『「学校と社会をつなぐ調査」最終成果報告書』河合塾。

https://www.kawaijuku.jp/jp/research/sch/pdf/2022_Transition_ReportT5.pdf (2024年4月15日)。

遠藤健・山田寛邦（2023）「大学・学部志望度と入学・卒業後のアウトプット間の検証―学部卒業 10 年後調査を事例に―」『大学入試研究ジャーナル』33, 205―211

木村治生（2019）「第2回 学習時間のあり方を考える その4 大学生の学習時間をどう伸ばすか」『データで考える子どもの世界』ベネッセ教育総合研究所。

https://benesse.jp/berd/special/datachild/comment02_4.html (2024年11月14日)。